
魔法と剣の物語

MIDONA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法と剣の物語

【Nコード】

N1359Q

【作者名】

MIDONA

【あらすじ】

科学の変わりに魔法の発達した世界《魔法界》。

ヨーロッパ連邦軍に所属する三人の子供、魔法界に紛れ込んだ発火能力者少年エンブ、どんな魔法でも使いこなす優等生の少女フェリシー、謎多き錬金術師の少女（幼女）ユカ。

そんな三人が織り成す、バトルあり、笑いありの近未来（？）ファンタジー。

序章（儀式（前書き））

結構長いので面倒くさかったら前書きは読み飛ばしてください。

どうもMIDONAです。

『僕たちの八重奏』、通称、僕八のほうもろくに書いてないのに新作です。

僕八とは、書き時（？）が別なので、両方平行して進めて生きたいと思います。更新速度は遅めになると思いますが、よろしく願います。

今回は、僕八とは打って変わって、本格派（？）ファンタジーです。あらすじに、科学と魔法が交差するとき……（以下略）と打ちそうになりましたが、自重しました（笑）

本来、読書をするときはファンタジーが基本なので、学園ものとかよりもファンタジーのほうが本職だったりします。

内容は、あらすじのとおりですが、今後、陰陽師系とか、なぜ科学界（現世？）に魔法が存在しないのかとか、世界の崩壊と創造とか、いろいろ書いていけたらいいと思います。

文体のほうは、冲方さんの『シュピーゲル』シリーズの文体を勝手に起用させていただきました。（著作権とか大丈夫だね……）

使ってみたら、情報圧縮しやすいし、無駄な接続詞も省けるので、バトル物には結構向いている文体だと思います。

読み方は、記号は読まずに流れて読んでいただければよろしいかと……

文体は、作者なりの解釈なので原版のほうと違ってたらすみません。あと、そのうち普通の三人称に化けるかもしれませんが、その辺は大目に見てください（笑）

そんなんですが、読んでいただけたら幸いです。

あと、感想もらえると作者のやる気がupします。

何が言いたいのかわかりなくなりましたが、剣と魔法の物語、よろしく願います。

それでは、どうぞ！

序章／儀式

「おじさん、何でこんなにラノベが必要なの？」

素朴な質問をする少年／目の前にライトノベルの山。

「神様のお供え物にするためだよ」

答える男性Ⅱ須藤孝^{すどうたかし}——黒い目＋白髪^{すどうたかし}の混じり始めた黒髪Ⅱ日本人の特徴／防弾チョッキ／長ズボン／後の儀式の警備につくための服装。

顔に笑顔——儀式の準備を手伝える年齢になった少年への成長を喜ぶ笑み。

「ふうん」

少年——神様がライトノベルなんて読むの、という当たり前の疑問すら返さず／注意深く周りを見渡す。

「炎舞^{えんぶ}、そろそろ運ぶから手伝ってくれ」 呼ばれて駆け寄る少年

Ⅱ紅蓮炎舞^{ぐれん えんぶ}——黒い目＋肌色の肌Ⅱこちら日本人の特徴／さっぱりとしたショートカット／長袖のTシャツ／紺のジーンズ／スニーカー。大人への階段を上り始めたばかりな勇敢さと幼さが共存。

「これから運ばいい？」

周りを見るのをやめ、一番手前にある本の山へ手を伸ばす。

「ああ、頼む」

炎舞のほうを振り返りうなずく／自分の手にも本の山——炎舞が本を持ったのを見て森の奥へ歩き出す。

慌てて追う炎舞——手にある本の重みでバランスを崩す。

「大丈夫か？」

呼びかける孝——転びかけた炎舞への気遣い。

「うん。有香^{ありか}だって大変だろうから、僕だってがんばらなきゃ！」

少年の力強い返答／同時に悲しそうな様子が見て取れる。

「悪いな、うちの娘のために。そうだな、有香が大仕事を任されたんだから俺たちが出来ることを少しでもしなきゃな」

娘の大仕事Ⅱ生贄——仕事なんてしてられないほどの悲しみ／同じように悲しい気持ちでいるだろう少年の前なのでその気持ちを押し殺す。

「それに早く終わらせて有香と食事食べたいし」

「そうだな、早く終わらせよう」

再び戻る笑顔／心からの喜び——自分の娘のことを気遣ってくれる少年の気持ち／気を使えるようになった少年の成長。

「それじゃあ、先行くよ！」

炎舞はそういい、走っていった。

「あ、炎舞、お父さんお帰り！」

炎舞と孝を出迎えた少女Ⅱ須藤有香——毛先のカールした短めのショートヘア／日本人らしい特徴／細い足／膝上までのスカート／レースの白い靴下／ピンクのスニーカー。皿をテーブルに並べ、調理で大変な母を子供ながらに手助け。

『ただいま』

土足のまま家の中へ入る。

入ってすぐにリビング——赤いカーペット／カーペットの上に机／机の上にたくさん料理。

向かって奥と左に一部屋づつ。

「お帰りなさい。もうすぐ出来るから待っててね」

奥の部屋Ⅱキッチンから声——有香の母Ⅱ須藤宏美。迎えにも出れないほど調理の真っ只中。

「お父さんがこっちで、炎舞はこっち」

有香に指された席にそれぞれ座る。

炎舞——入り口から一番近い席／孝——炎舞の向かい。

有香——最後の皿を炎舞の前に置く／席に着く——炎舞の右隣。

「これで最後ね」

台所から出てくる女性Ⅱ宏美——胸の辺りまであるパーマのかかった髪／日本人らしい特徴／エプロン／手に先ほどまで作っていたローストビーフ／膝下まである白いスカート。

エプロンをはずす／席につく——有香の向かいⅡ孝の左隣。

机に食べきれないほど沢山の世界各国の料理——しゃぶしゃぶⅡ日本／エビチリⅡ中国／フライドポテトⅡアメリカ／ピザⅡイタリア／ローストビーフⅡイギリス。炎舞には何の料理かも分からないものまである。

「炎舞君、火をつけてもらっていい？」

宏美の声——シャブシャブ用のコンロをさす。

「わかった」

そういつて指をコンロに近づける／指の先から火が出るⅡ^{パイロキネシス}発火能力／コンロに火がつく。

「ありがとう。今日は二人のお祝いだから有香も炎舞君も沢山食べてね。村のみんなも色々届けてくれたし、お母さんも頑張ったから」

「今日は有香のお祝いだから俺は関係ないでしょ、おばさん」

炎舞——自分もお祝いということに疑問。

「いいえ、あなたもよ。もしかして忘れちゃってる？」

思案——誕生日・何かに合格——どちらも否／初めての仕事、と一瞬思ったが祝うようなことでもないので即却下——やはり心当たり無し。

「何も思い当たること無いけど…」

「やだ、今日で丁度あなたが来てから六年目の記念日じゃない！」

この村Ⅱ^{森の中}アラスカにある^{サイキッカー}超能力者の集落Ⅱ^{ハイド}通称隠れ家——^{ハムレット}世界各国で超能力に目覚めた者を保護／教育——超科学的力を世界から隠す／世界で起こる超自然現象に対抗するため。

炎舞——六歳で能力に目覚める／暴走／自宅に引火——親に怖がられ路上に捨てられる／^{ハイド}隠れ家の住民により^{ハムレット}保護——そのまま^{ハム}隠れ家の住人に。

「いいよね、炎舞は。一年に二回もお祝いしてもらえて」

有香——生まれ／育ち——共にハイド ハムレット隠れ家。

「そんなことないって」

悲しそうな声——ハイド ハムレット隠れ家に来た日——親に捨てられた日——この日が来る度に親に見捨てられたことに対する傷の深さを実感する。

「それに今日は有香のお祝いでもあるだろ」

「うん」

うつむいて答える有香——触れてはいけない話題に触れてしまったことに気づく。

「とりあえず食べようぜ。あ、最後のピザもらい！」

とりあえず話題転換——最後一切れのピザに手を伸ばす。

「あ、ずるい！」

遅れて手を伸ばす有香——二人の視線がぶつかる。

「いいよ、有香にあげる」

最後の食事だから食べたいものを食べさせてやりたい——炎舞の正直な思い／同時にずっと心の中に抱いていた思いをぶつける覚悟を持つ。

「有香は本当に生贄になんてなるの？」

いきなりきつい口調——慎重に入りだしたいと思ったが気持ちが高ぶり失敗。

「うん」

有香の落ち着いた口調／それが炎舞にさらに火をつけた。

「何でだよ？別に生贄になんてなる必要ないだろ？」

「私が選ばれたから。それに、私がやめたらほかの子がやらなくなるでしょ。私一人が我慢すれば、ほかの子がつらい思いする必要ないならそれでいいの」

ほかの子の代わりに自分が犠牲になる——有香の本心／信念。

「おじさんもおばさんもいいの？」

有香を説得できそうに無いので、親を説得。

「仕方ないだろ、有香が選ばれたんだから」

声を低めて言う孝——自分の娘をこんな形で失うことへの悲しみ

／怒り。

「だったら、儀式なんてやめちゃえば…」

「そういうわけにはいかないの。お婆さんが子供のとき一回生贄の子が逃げ出して行われなかったの。その年はぜんぜん作物も育たず、沢山の人が餓死したわ」

儀式Ⅱ豊作の儀式——行わない年は必ず不作になり、やめようにもやめられない。

「でも…」

言葉に詰まる炎舞——さすがに言葉が見つからない。

「須藤有香はいるか？」

突然玄関から声——生贄を迎えに来た男Ⅱ村長——白い肌／淡褐色の目／白く長いひげ／むき出しの頭／顔のあちこちに皺／手に杖／丸まった背。生きてきた年月と威厳が同時に感じ取れる。

周りに三人の従者——白人／黄色人種／黒人——みな20代前半ほど。

「もうそんな時間ですか？」

驚く宏美——食事に夢中になりすぎて時間を忘れていた／すでに儀式の30分前——準備が全て終わり警備などがしかれ生贄が置かれる時間。

「そうだ。有香こちらへ」

村長の落ち着いた思い声／有香が席から立ち上がり、村長の前へ。

「準備はいいか？」

「はい」

落ち着いた声——心に何かを言い聞かせる。

「それじゃあ、行くぞ」

そっくり去っていく村長と従者十有香／ただ見送るしかない炎舞十孝十宏美。

「俺も、そろそろ警備に着かなきゃいけないから」

暗く小さな声——外に出る孝。

「お婆さん、有香をとめなくていいの？とめるならいまだよ」

「炎舞君はこのままおうちに帰るのよ。一人で帰れる？送っていいか？」

儀式に携わるもの意外は自宅待機——儀式を邪魔しようとするものを出不いたため。

炎舞の家〓寮——保護された未成年は成人まで寮で集団生活。

「いいよ、一人で帰れるから！」

慌てて答える炎舞——手と首を振って必死で断る。

「それじゃあ、また明日ね」

今にも消え入りそうな声。

「うん、またね」

素晴らしい残し走り出す炎舞——寮ではなく森の方。

後ろからは、宏美の鳴く声が聞こえていた。

真ん中にそびえる岩の塔／塔を囲うようにして書かれた円形の幾何学模様——村の広場。

それを囲む10人の修道服〓儀式を執り行う者達。 そのまた周りを囲む男たち——白人／黒人／黒髪／金髪／碧眼／緑目／さまざまな地域の人達——20代から50代まで20人ほど〓儀式を警備する村人。

そこから近くも遠くも無い位置にかすかに輝く炎〓パイロキネシス発火能力。

その主である炎舞——寮へは行かず道ではなく森の中を横切って広場へ直行／一番警備の薄い塔の裏手が見える位置から有香を助ける方法を思案中。

塔の上に横たわる有香〓糸まとわぬ姿〓熟睡中——おそらく催眠術か催眠薬によるもの。

すでに円を囲むものたちがわけの分からぬ言葉を発している——呪文か何か。 光りだす幾何学的模様／光出す塔／有香の上でねじれる景色——おそらく儀式の終わり近く。

あせる炎舞——いまだに手段が見つからず。

儀式に見入る警備の者達——思考を中断／無言で走り出す炎舞。それに気づく男／炎舞が手のひらに炎を浮かべる。

近づくにつれ、男の顔がハッキリとする／立ち止まる炎舞——男
孝。

「おじさん、有香を助けに行くからどいて」

呼びかける炎舞／手の炎が消える。

「炎舞、戻りなさい」

孝と目が合う／不意に視界が霞む／孝の姿が消える。

異変に気づく炎舞——知覚操作^{パースペクティブ}《視覚系》——孝の能力。

前方90度に火炎放射——孝がいるだろう方向を全面的にカバー。目にも留まらぬ速さで孝に迫る炎／直撃／炎上。

悶える孝／炎に気づき集まってくる大人たち／再び走り出す炎舞。一斉に銃を向けられる／自分の周りに炎を展開／炎舞の姿が歪む

陽炎。

飛来する銃弾／僅かにずれて通過。

前方からの放水^{アクアキネシス}／放能力／周りに展開していた炎を前方へ。

衝突／立ち上る水蒸気／押し返す炎／術者に直撃／炎上。

再び向けられる銃口／立ち止まる／振り返る。

右手を挙げる／上空に無数の炎／細く短い棒の形。

右手を降ろす／飛び出す炎／銃口に進入——弾の爆薬に引火／暴

発——銃がすべて鉄塊と化す。

塔の前面にたどり着く。

「やれ！」

叫ぶ放水能力者^{アクアキネシスト}——焼き爛れた顔——体の火を自らの能力で消した

跡。

階段の一段目で止まる／振り返る。

四方に無数の水の槍——一斉に迫る／全方向に炎の壁を形成／衝突。

炎舞——無傷／再び階段を上り出す。

アクアキネシスト

放水能力者が右手を挙げる／再び槍を作り出す／耐えられず倒れる／周りの大人たちが炎舞に迫る。

「もうよい！」

不意に響く村長の声——警備の大人たちの後ろから。

一斉に止まる大人たち／気にせず階段を登る炎舞。有香の上の空間のゆがみが激しくなる／穴ができる——2メートルほどの大きさ／森の景色が写る。

有香の体が宙に浮く／炎舞が右手を伸ばす。

「有香あー！！」——炎舞の叫び。

有香が穴に飲まれ始める／炎舞がすんでのところで手を掴む／有香の体が完全に飲まれる／地上で踏ん張る炎舞／穴が小さくなる／炎舞の体も浮き始める／飲み込まれる。

穴が消えた後塔の上には何も残らなかった。

一章／入隊

ヨーロッパ連邦

EU S——新たな技術を取り込むアメリカ／急成長を見せる中国などの大国に経済的／文化的に対抗するために作られたEUがさらに結びつきを強める——一つの国家に。

政治的／経済的統合よりも文化的統合を推進——世界で最も数多くの魔法の起源を持つ地域が協力したことにより、アメリカ／ロシア／日本などを追い抜き経済／文化／技術の中心に。

イタリア地方バチカンにあるヨーロッパ連邦軍《魔法部隊》のイタリア第2支部の一室——床にレッドカーペット／映像を写す水晶／積み上げられた書類——情報管理室。

「こんにちは」

その部屋にある唯一の木製ドアを開けて入る少年。

「お疲れ様。あと一人だからもう少し待っててね」

おそらく普通に話しているだけに妙に色っぽい女性の声——黒い長髪のストレート／肌色の肌／黒といっても差し支えない目／放漫な胸／きっちりとしたスーツ姿／椅子に座ったまま——大人の魅力満載のナイスバディ。

「ああ、アンタか」

無表情な少女Aの声——肩のあたりで切られた金髪／鋭い視線——青い目／白い肌／平均的な胸——誰も近づくなと言っているような雰囲気。

「お前と一緒か」

嬉しそうな少年の声——短く切られた黒髪／黒い目／肌色の肌／平均的な背丈——どこにでも居そうな男子の風貌。

「悪い？」

少女Aの声——相変わらず感情なし。

「えっ、あ……」

少年の返答——言葉に詰まる。

「ごめんなさい、遅くなりました」

突然聞こえる声——少女B——毛先のカールした短めのストレート／黒い髪／黒い目／細い足／小さな背——張り詰めた空気を一瞬で壊す脳天気な明るさ。

「それじゃあ、始めるわよ」

椅子から立ち上がる女性——3人を集める。

「今年の連邦軍、イタリア第2支部に配属になったのは、君たち3人です。厳しい試験の結果、軍に配属になった事に心から祝福申し上げます」

女性の声——先程までの色っぽい様子は微塵もなし／堂々とした大人の態度。

少し緊張する3人／女性が再び腰を下ろす。

「それじゃあ、自己紹介をしてもらおうかしら。まずはあなたね」

「はい」

女性の指先が少年の方へ／少年がいきなりの指名に少し驚く／すぐに自己紹介を始める。

「エンブーグレンです。生まれも育ちもフランスで、^{スキル}超能力は^{バイオ}発火^{キネシス}能力です。魔法は一切使えませんが、よろしく願います。」

頭を下げる炎舞／突然女性の声——椅子に座りながら／以前の色気たっぷりの様子。

「嘘を言わなくていいわよ」

「先程言ったことに嘘は無いですけど」

戸惑うエンブー再び口を開く女性。

「それじゃあ、私が言っちゃうわね」——相変わらず色っぽい声。

「生まれは《科学界》^{フォームホール}の日本、幼少時に^{スキル}超能力に目覚めアラスカに移住。12歳で次元の裂け目に飲み込まれ《魔法界》へ。これで間違いないわよね？」

「はい」——エンブー戸惑いを隠しきれず。

「科学界！？」——少女AⅡ驚きで目が大きく開く／直ぐに睨みつけるような目に。

「あと、得意魔法は炎の元素魔法って名乗りなさい」

「俺、元素魔法習得の為の儀式なんて受けてませんけど」

反論するエンブ。

「あなたは発火能力^{パイロキネシス}だけでも充分戦えるから軍に配属になったけど、普通そんなことあり得ないのよ」

「はあ」

女性の強い物言い／反論すら出来ないエンブ。

「あと、出身に関してはあなたが最初に話した通りでいいわ」

「分かりました」

返答するエンブ——押されるがまま。

「次はあなた」

女性の指先が少女Aへ／自己紹介を始める少女A——いかにも面倒くさそう。

「名前はフェリシーⅡセヴェール。出身はフランス。超能力^{スキル}は無し。得意魔法は筆記魔法全般です」

口を閉じる少女Ⅱフェリシー——よろしくお願いします、の一言もなし。

「問題ないわね」

うなづく女性／とっさに反論するエンブ。

「どういうことだよ、得意魔法なしって？」

「どの魔法も万遍なく使えるってことよ」

口を閉じたままのフェリシー／代わりに女性が返答。

「そんなことって……」

エンブ——続けて食いつく。

「あんたみたいな落ちこぼれとは違うのよ」

国立第一中学校の成績——フェリシーⅡ学年主席／エンブⅡ最下位。

「……」

エンブの沈黙——返答できず。

「それに、よく軍に入れたものね」

連邦軍Ⅱ最高の仕事——強い力を持つものを常に国の管理下に置
くため／死亡率が高く敬遠されがちなため——最高の待遇／世界一
の企業の社長の年収を優に越える給料。

「……」

「学校での成績が強さを表すとは限らないしね。成績は仕える魔法
の数や制御の上手さで決まるし」

女性の言葉——黙るエンブに代わり補足。

「それじゃあ、最後にあなた」

にらみ合うエンブ＋フェリシー／2人を気にせず次に進める女性
——伸ばした指先が少女Bに／元気に返事をして話し始める少女B。

「ユカⅡストウです。育ったのはフランスの孤児院ですが、12歳
より前の記憶が無いです。超能力^{スキル}は使えませんが、召喚魔法の錬金
術が得意です。よろしくお願いします」

12歳以前の記憶が無いというより12歳そのもののような少女
BⅡユカの話し方／姿／振る舞い。

有香!？——ユカに誰かの面影を見るエンブ／そんなわけないか
——勝手に納得。

「あとは私ね」

立ち上がる女性——やはり色っぽい。

「名前はシェイラⅡレデーロ、出身はスペイン。通信官ね。得意な
魔法は精神系全般、超能力^{スキル}はヒミツ♪そういうことで、これからよ
ろしくね」

女性Ⅱシェイラが話し終える／軽く頭を下げる／再び口を開く。

「今日から、この第2支部で生活してもらうことになるわ。詳しい
ことは、部屋にいる家政婦さんに聞いてもらえばいいわ」

「はい」

ユカの元気な返事／無言で頷くエンブ／特に反応なしのフェリシ
ー。

「あと、任務以外で外出する場合は門番さんにその趣旨を伝えてね」
「はい」――ユカの返事。

「分かりました」――炎舞の返事――意外とハッキリ。

「……」――無言のフェリシー――聞いているのかどうかすら分からない。

「まあ、伝えなくてもどうすることもないけどね」

そう話すシェイラ――軽く笑いながら／右手を軽く挙げるエンブ。

「あの……」

「何？」

「どうすることもないって……」

「本当は罰を与えたいのは山々なんだけどね。でも、それがきつかけで反乱をおこされたら、たまったものじゃないしね。だから、犯罪なんかも大抵無罪扱いになるわ」

「はあ」

話すシェイラ――世間話でもするよう／エンブの返事――反応に困る。

「何か質問があれば今聞くけど、何かある？」

「何ありません」

問いかけるシェイラ／ユカの返答／頷くエンブ／反応なしのフェリシー。

「それじゃあ、部屋の方に行ってちょうだい。入り口のところにあった階段から2階に上がってもらえれば地図があるからそれで場所を確認してね」

そう言われ3人は部屋を出て行った。

「おい、やっぱり間違いだな。これ」

「違うでしょ、書いてあるんだから」

地図を頼りにたどり着いた部屋の前――誰にともなく質問を投げかけるエンブ／ボソッと答えるフェリシー。

部屋の前の表記――214号室　フェリシーⅡセヴェール・エンブ／グレン・ユカⅡストウ。

一つの札に書いてある3人の名前Ⅱ同じ部屋での生活。

「ただいま」

言葉が続かず、ぼっ立っている2人／ユカが先にドアを開けて中へ。

「おじゃまします」

「失礼します」

エンブ／フェリシーも遅れて中へ――初めてはいる部屋で妙に緊張／自室に入るときにあわない挨拶に。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

出迎えの家政婦――白いフリルのカチュウシャ／黒い上着／フリルのついたスカート／その上にある白いエプロンⅡメイド服。

その衣服に身を包んだ黒髪／茶色い目の17・8の少女の挨拶。

「……」

どこからどうみてもメイドにしか見えない相手に呆然となるエンブ／気にせず話し始めるメイド。

「フェリシー様、ユカ様、エンブ様でよろしいですね」

「はい」

フェリシーの返事――やたらと高めのトーン。

「私はメイドです。わたくし今日から皆様の身のお世話をさせていただきます。不束者ではありますが、よろしく願います」

「よろしく願います」

丁寧にお辞儀をするメイド／それに答えるフェリシー＋ユカ。

1人置いていかれるエンブ――職業名ではなく名前を名乗ってくださいⅡ内心のツツコミ。

「お疲れのご様子ですので、説明を手軽に済ませてしまいますね」
メイドが説明を始める。

別に疲れてないけどⅡエンブの内心――1人だけ状況についていけず内心投げやり。

「今居るのが、共通で使用する大広間になります」

大広間——大きめのテーブル／赤い絨毯／レンガで造られた暖炉。どこにでもありそうなリビングの風貌。

「右に2つ、左に1つあるドアが個室へのドアですね」

ドアⅡ木製／鍵付き。下げられたプレート——左側Ⅱエンブ、右側手前Ⅱフェリシー、右側奥Ⅱユカ

「そして奥のドアは左から浴室、お手洗いと、恥ずかしながら私わたくしの自室となっております」

奥の3つのドア——丁寧に、浴室のマーク／トイレのマーク／メイドと書かれた札がついている。

「今日は1日休暇だそうですのでご自由にお過ごしください。ご昼食は呼びに参りますので」

「はい」

ユカ＋フェリシーの元気な返事。

それを境に各々の部屋へ散っていった。

木製のベッド／勉強机を連想させる机／綺麗な模様のクローゼット。高級ホテルよりも、別荘のイメージ。

柔らかい——部屋を一通り見終わるなりベッドに腰をかけたエンブの素直な感想。

コンコン——不意に響くノックの音。

「ご主人様、お少しよろしいでしょうか？」

ドア越しに聞こえるメイドの声。

「どうぞ」

ドアを開けるエンブ／失礼します、と断って中に入るメイド／口を開く。

「送られてきたお荷物は勝手ながら整理させていただきましたが、問題なかったでしょうか」

「はい」

本棚に並べられた本／クローゼットの服――まるで店の展示品。

「しまうの上手ですね」

会話が続きそうにないので、感想を述べる。

「恐縮です」

メイドの心からそう言っているかのような返事。

「あの、メ、メイドさん……」

エンブの語尾のしぼんだ問いかけ――呼び方が呼び方だけに恥ずかしくなる。

「何でしょうか？」

それに気づかず不思議な顔をするメイド。

「本名を教えてもらってもいいですか？」

呼び方を変えたい――エンブの本心。

「先程申し上げましたようにメイドと申します」

につこり――炎舞の変な質問に疑問／職業故にそれをごまかす。

「職業ではなくて」

メイドがメイドと名乗る事〓執事が執事と名乗るのと変わらないだろう――エンブの内心でのツツコミ／訳が分からないのでボツ。

「失礼いたしました。本名はメイド〓メイドと申します」

啞然となるエンブ／かまわず続けるメイド。

「私たちの家系はメイド家といまして、世界最多のメイドや執事を輩出しております。私の母がメイド家出身なのですが、父の家系に嫁に入りまして、名字が違ってても立派なメイドになれるように、メイドと名付けられました」

いきなり大きなスケールの話／さらに啞然となるエンブ。

「ですが、メイド家の後継ぎであった叔父が死んでしまったため、私が養子に入りメイド〓メイドの誕生という訳でございます」

「あだ名とかないんですか？」

話が終わるなり直ぐに質問を切り替え。

「恥ずかしながら昔からメイドちゃんと呼ばれてきたので……」

笑顔で帰るメイド／額に汗が浮かぶよう。

「もしよかったら、ご主人様がご考案してくださってもかまいませんが」

早速思案——メイメイ／メイちゃん——恥ずかしいのは変わらないので却下／他になし。

「それじゃあ、今まで通りメイドさん、と呼ばせてもらいます」

「ありがとうございます、ご主人様」

諦めたエンブ／返すメイドⅡにつこり。

「あと、出来れば呼び方を変えてほしいんですけど——エンブの本心その2。

「でしたら、お坊ちゃま、エンブ様、エンブ君、お兄ちゃん等いろいろ出来ますが、どうしましょうか？」

お坊ちゃまⅡ大して変わらないので却下／エンブ君、お兄ちゃんⅡ俺にはそんな性癖はない——内心の叫び。

「呼び捨てで呼んでもらってもいいですか？」——エンブの必至の提案。

「まさか、そんな失礼なこと……」

断るメイド——さすがに慌てたような顔／再び折れるエンブ。

「普通に名前で呼んでください」

「かしこまりました、エンブ様」

メイドの返答。

「そういえば、何か用事があったんじゃないですか？」

話題を変えるエンブ／それに質問を返すメイド。

「ご夕食のことなのですが、何かご希望があればお作りしますが何かありますでしょうか？」

「希望って、なにが作れるんですか？」

「フランス料理からイタリア料理、中華や和風、各種民族料理など大抵のものは心得ておりますが」

「凄いですね」

驚きのあまりそれしか言えず／しっかりと意識を持つ。

「お好み焼きとかって作れますか？」

お好み焼き——6歳で生き別れた実の母の得意料理。

「大丈夫ですよ」

「それじゃあ、お願いします」

「かしこまりました。それでは失礼いたします」

その言葉を最後に部屋を出ていくメイド。

その日の夕食は、しっかりと覚えていない母の味を鮮明に思い出すものだった。

「早速なんだけど」

第2支部に到着した翌日／シェイラの自室。

昨日とは違う服装——学ラン／セーラー服Ⅱ軍の制服——で話を聞くエンブ／フェリシー／ユカ。

朝食の味の余韻を楽しみながら話を聞くエンブ。

「西部の方に任務に行ってもらうわ」

説明するシェイラ——部屋着。

「西部って西部ですか？」

西部Ⅱ剣士の地方。急激な魔術文化の成長により文化／生活格差が開く／無視して政策を進める／より格差が開く／非魔術師による反乱。

その後、EUS議会により、魔術師を西／非魔術師を東に移住させる——東西それぞれ政治／文化が成長——国際上では同一国家でありながら、今ではほとんど別の国のように。

「皆さま、お飲み物が入りましたので、よろしかったらお飲みください」

不意に入る声——バンダナでまとめられた髪／一般的なエプロン／30代だろう顔に浮かぶ暖かな笑み。

「ありがとうございます、サーラさん」

暖かな紅茶を受け取るシェイラ／3人もそれに続いて受け取る。

「紹介しておくわね。私の部屋の家政婦のサーラⅡピアッツァさんよ」

「サーラです。よろしく願います」

挨拶するサーラ／返す3人／続けて口を開くエンブ。

「なんで、メイド服じゃないんですか？」

一瞬で場が静まる――自分の失言に気づく／苦笑しながら返すサーラ。

「スミマセン。あいにくそのような物は持ち合わせていないもので」

「え、だって家政婦＝メイドじゃ」

「申し訳ありません。イメージを損なわせるような服装で。次までには必ず準備を……」

「そうじゃなくて」

すかさず否定――自分を変な目で見られるのを防ぐため。

黙ってみていたシェイラが口を開く。

「この支部ないでも、家政婦がメイドなのはあなた達の部屋とその他一部ぐらいよ」

「なんで……」

言いたいことが分かってるんなら早く口を入れてください。

「それは、メイドがいつて希望した人がいるからよ」

話に興味を示さないフェリシーを除く全員の視線がエンブに／少なくとも自分でないことを内心で確認／同時に弁解の余地がないことを悟る／急いで話題を逸らす。

「この紅茶美味しいですね」

「ありがとうございます」

よし成功――心の中でガッツポーズ。

「まあ、メイドちゃんには負けませんが」

結局戻る話題。

「仕方がないんじゃない？あの子って、前年度の奉仕選手権の世界大会で優勝した上、戦闘部門を除いて最優秀賞を総ナメしたんですよ」

「そうですよね。私なんて総合で3位のみですもんね」
フオローしたシェイラ／逆に落ち込むサーラ。

「ちなみに、その大会って難しいんですか？」

訊ねるユカー——首を傾げる姿が保護欲を誘う。

「難しいわよ。なんてったって、世界中のメイドさんや執事、お手伝いさんが全員参加するのよ。メイドがいるから目立たないけど、サーラさんも充分すごいのよ」

「そうですよね。この紅茶美味しいですもん」

ユカの柔らかな声／顔。

「でも、何でそんな凄いメイドさんがユカ達のお世話をしてくれるんですか？」

「誰かさんが世界一のメイドをって希望したから」

履歴書内のアンケートの質問のひとつ——職場に対しての希望／ああ、あそこか——エンブの回答〓無記入。

再びエンブに集まる視線／相変わらず無関心なフェリシー。

「で、今回の任務ってどんな内容ですか？」

「またも話をそらす。」

「ああ、あなた達、連邦軍の《剣士部隊》が西部こっちに攻め込んだ事件知ってる？」

「はい」

話を聞きだしたフェリシーの返答。

「今は、警察が応戦してるわ」

「それを制圧して来いってことですか？」

「それが出来たらいいんだけどね」

「だったらすればいいんじゃないですか？」

フェリシーの疑問——何も考えず。

「出来ないからこうやって話してるんじゃないの」
返すシェイラー——多少あきれた声。

「出来ない理由があるってことですよね」
割り込むエンブ。

「ご名答」

エンブを指差すシェイラー／すぐに戻る。

「攻め込んできた全員が催眠状態だったのよ」

「つまり、どういうことですか？」

聞き返すエンブ。

「要は、何者かに乗っ取られたか否かを確かめてこいってことですね？」

いち早く自体を理解したフェリシー。

「そういうこと。国際的な立場が悪化しかねないから氾濫と分からない限り軍を出せないのよ」

「具体的には？」

「東部のお偉いさんに確認とか取れば理想ね」
向こう

「もし、何者かに乗っ取られてたら制圧すればいいですか？」

「あなた、やたらと血走るわね」
攻めるような声。

「乗っ取られてたとしても、これだけ大規模な術をかけられるやつ相手にあなた達が勝てるわけないから、分かり次第、別の部隊を送り込むわ」

「それじゃあ、行ってきます」

部屋を出ようとするフェリシー。

「待ちなさい」

明らかに怒りの見える声／フェリシーの足が一瞬で止まる。

「初任務で緊張してるのは分かるけど、落ち着きなさい」

「緊張なんて」

返すフェリシー／再び怒声。

「それが緊張って言うんでしょうが」

「うっ……」——反論できず。

「で、フェリシー、あなたテレパス石ってどのレベルのものを持ってる？」——普通の声に戻る。

「ヨーロッパ全域に届くくらいまでは」

「それじゃあ、これをもっていきなさい」

机の上にある赤い石を取る／フェリシーへ——受け取るフェリシ

1。

「いいんですか、こんな高価なもの」

「支給品よ。今回はあんまり変わらないと思うけど、一応地球上ならどこでも伝わるから」

地球上って、それ以外に出ることなんてあるんですか？——フェリシーの疑問。

「あとこれ」

机の上の人形に手を伸ばす／フェリシーに手渡す。

受け取ろうとするフェリシー／動きが止まる。

「なんですかこれ？」

シェイラの手にある人形——整った顔＋凹凸のある身体Ⅱシェイラ／紐を中心とした露出の多い黒い服／別についている黒い鞭。

「何って、人形よ」

『そんなことは分かります——エンブ＋フェリシーの斉唱。』

「藁人形に釘をさす儀式って知ってる？」

「丑の刻参りのことですよ？」

日本人であるエンブではなくフェリシーの返答。

「そうよ。その応用版で私のコピーに当たるわ」

「それをどう使えと？」

「テレパシーの届かないところにいるときの連絡手段よ」

「テレパシーの届かないところって……」

あるのかよ——内心の叫び。

「そのうち分かるわ。それより使い方なんだけど」

一瞬身構えるフェリシー＋エンブ＋ユカ。

「私から伝えるときはいいけど、あなたたちから連絡するときはこちらを押しなさい」

ここⅡ2本の足の付け根。

「他に方法は——エンブの質問／間髪いれず。

「ないわ——即答。

「分かりました」

受け取るフェリシー——早く話題を引き上げる!! 使う気無し。

「あと、よかったらつながってるときにこの鞭でたたいてね」——手に鞭／フェリシーに渡す。

「効果は」——抵抗の気力すらなし。

「つながってるときは、この人形の衝撃がそのまま私の感覚になるから、そういうことよ」

「分かりました」——受け取るフェリシー——もちろん使う気無し。

「他に質問はある?」

「リーダーは?」

「言ってなかったかしら……? これから基本的にあなた達3人組スリーマンセルで動いてもらうから、そのときはフェリシーが長でお願いね」

「かしこまりました」——誇らしげ。

「他にある?」

「いえ、特には」

フェリシーの返答／頷くエンブ＋ユカ。

「魔法陣って1階でしたよね?」

「そうだけど、必要ないわ」

「必要ないって?」——目を丸くするフェリシー。

「ユカがやるから。ね?」——ユカの方を見る。

「ここでやっていいんですか?」

「大丈夫よ」

「はい」

ユカが右手を挙げる／宙に縦に線を書く。

空間が割れる／奥に黒い空間が現れる。

「それじゃあ行こ! 炎舞、フェリシー」

上／前／下——全てが闇。

だが、自分の体／相手の体はしっかりと確認できる。
先ほどの割れ目に入った中の空間。

「結局、ここって何だ？」——エンブの質問。

「よく分かんない」——ユカの回答。

「おそらく、別次元でしょうね」——フェリシーの補足／さらに続く。

「転移魔法って、普通は魔法陣から魔法陣に次元の裂け目ワームホールを開いて移動するんだけど、それを別次元に移動することで同じようなことを起こしてるんでしょ。魔法陣がないのに次元の裂け目を作ったのか、とか分かんないところも多いけど」

「ユカって、そんなすごいことしてたんだ」

「こんな調子だし、本人も分かってないんでしょ」

目を丸くするユカ／フェリシーのあきれた感じのしめ。

「この辺でいいかな」

ユカが足を止める／右手を宙に／縦に線を描く。

床の描いた線の向こうから見える光景——石畳／レンガでできた家——おそらくドイツの市街地。

覗き込むエンブ。

「へえ、ここがそうなのか。でも、ユカ、地面まで結構距離あるぞ。どうするんだ？」

穴の奥——2階建ての建物の屋根を上から眺められるはずの高さ。

「え？地面にでれる高さで開けたはずなんだけど……」

覗き込むユカ／エンブの肩を掴む／前屈みになるエンブ。

「見せなさいよ」

続いて覗き込むフェリシー／さらに前屈みになるエンブ。

「おい、押すなって」

倒れそうになるエンブ。

「見えないでしょうが」

お構いなしに押すフェリシー／こらえるエンブ。

「もうちょっと前いきなさいよ」

さらに押すフェリシー／さらに踏ん張るエンブ

「本当だ」

エンブが耐えきれなくなる／穴から落ちる。

「エンブー」——ユカの叫び。

「フェリシー、フェリシー。聞こえてる？」

不意に響くシェイラの声——バックの中から。

「何でしょうか？」

バックの中から人形を取り出す。

「言い忘れたんだけど、西部は次元がだいぶずれててうまく次元^{ワーム}の裂け目が作れない可能性があるから、フランスのドイツの国境付近に出てから結界に割れ目を作って、東部と西部を直接つなぎなさい」

「術式はどれを使えばいいですか？」

「ユカが出来るはずよ。ね？」

「大丈夫です」——ユカの返答。

「それじゃあ、接続を切るわね」

動かなくなり四肢が垂れる人形／それをバックにしまうフェリシー／再び宙に線を書くユカ——2人にはエンブのことなど頭になかった。

フランスとドイツの国境付近。

「確かに結界が貼られてるわね。しかも結構強固だし」

ドイツ側に手を伸ばすフェリシー／向こうは普通に見えるのに何かが手に当たり向こうへ行けない。

「それじゃあ、開けるよ」

結界を指でなぞるユカ。

「先行くね」——ドイツ側へ足を踏み入れながら。

「うん」——ほとんど生返事。

普通なら複雑な術式を組んで／大変な手間をかけて行う作業。それをいとも簡単に行っていたユカ。

それは、学年主席で中学を卒業したユカのプライドが傷つくには充分だった。

「早く」

「分かってるわよ」

ユカに急かされフェリシーは国境を踏み越えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1359q/>

魔法と剣の物語

2011年2月5日12時05分発行